

◆懇親会担当より

武田博直

懇親会担当 (株式会社 セガ)

立食懇親会には、こんなメニューを用意した。「青山」の豪華な和洋オードブル。(産総研酒井氏ら推薦の) アクアシティ「築地すし好」から、まぐろなど420貫。スーパードライ250ml缶(乾杯用)。エビスビールの大瓶。「真田六文銭」(辛口美味清酒)。「コンチャイトロ」などカベルネ種赤ワイン。ぶどう。なし。ソフトドリンク。大量のお菓子(疑わしい合成保存料が、少ないもの)。企業展示関係者に「弁松総本店」(嘉永三年創業)のお弁当。

食事は好評で、話も弾んでいた。しかし、参加者数が不明なうちに食事を用意する計画であったこと、懇親会費用の単独での黒字化を心掛けたことなどから、すし100貫が足りなかった。食べものが無くなった最後の6名の方に、お詫びします。また、乾杯時の机の配置が適当でなかったなど、精神的にも疲労した。

ともあれ、運営委員の諸氏、買出しと会場整理をお願いした多田隈氏ほか館研および多摩大諸氏、遅くまで残られた展示企業の方々のご協力で大過なく終了できた。最後に、国際交流館の岡田様、後片付けして下さった受付嬢の皆様に、心からの謝意を記します。

◆会場 / 総務担当より

長谷川晶一

総務担当 (東京工業大学)

「会場について」

今大会では、充実した企業展示、技術展示、作品展示、招待講演、に加えVRコンテンツ、特別公演、初日の懇親会と盛りだくさんの内容を、昨年オープンしたばかりの東京国際交流館という会議場で行いました。

東京国際交流館は、日本国際教育協会の会議場で留学生のための宿舎団地の一角にあります。日本科学未来館の隣に位置しており、パレットタウンや、ジョイポリスのあるデックスにも歩いて行けるという好立地です。私もゆりかもめの車窓から、朝日に映える東京の新名所の景色を鑑賞しながら通うことができました。

このように盛りだくさんの大会をお台場という場所で行うため、多くの人にご協力いただきました。

技術・作品展示、企業展示の会場の設営は阪大の清川先生が取り仕切ってくださいました。設営業者との折衝の場に同席した際には関西人の価格交渉を拝見し、感心・驚嘆いたしました。明るく解放的な企業展示会場、展示ごとの明るさの要求にこたえた技術・作品展示会場などのきめ細かな配慮は清川先生と東大の稲見先生によるものです。

4階の会議場奥の技術・作品展示の部屋があまり目立たなかったという問題がありましたが、会場を暗く保つこととの両立が難しく、今後も課題になると思われました。多くの学会で基本的なサービスとなりつつある無線LANによるインターネットサービスですが、今大会でも会場内に無線LANによるインターネットサービスを実現できました。会場のネットワーク運用方針の都合上メールが使えなかったのは残念でしたが、展示をなさった方を中心に多くの人にご利用いただけたことと思えます。

講演・懇親会・公演では、会場費のこともあり短時間での準備をお願いしましたが、セガの武田さん、東大の渡邊さんが手際よく進行してくださいました。

最後になりましたが、なによりもたくさんの方にご参加いただけたことをうれしく思っております。皆様の熱意に感謝いたします。ありがとうございました。

「総務について」

当初、何をやる担当なのだろう？とと思っていましたが、終わってみると、Webが45%、当日の受付・会計が35%、その他の事務が20%くらいだったかと思えます。

発表・展示の受付、論文の登録、各種告知、メールの送信とWebで行う仕事が増えた現在、Webの作成とその維持管理は、とても重要で手間のかかる仕事になってきました。今回Webの品質維持に多少問題がありました。ご迷惑をかけた皆様、申し訳ありませんでした。今後は、できるかぎりWeb担当という人を作るべきだと思います。

ICAT2001のWebページを担当したのでそのまま流用できるかと思ったのですが、日本語化に手間取ったり、展示の登録を作ったりと仕様変更が多く、思いのほか手間がかかりました。Webを元にしたCD-ROMの作成も直前になってしまいましたが、なんとか間に合わせることができました。CD-ROMはMac OS 9以前で読めないという問題がありますが、カラーのPDFやムービーファイルを多数収録することができました。

一方当日受付は、例外処理が多く電子化してもあまり

楽にならないので、当日は受付用紙に記入する方式が良いかもしれないと思いました。システムを作るよりも予行練習を一度やって受付担当者が受付の流れと例外の扱いを完全に把握することの方が重要なようです。幸い今回は、初日の朝に多少混乱がありましたが、そのあとはスムーズにできていました。これはどちらかというと、できの悪いシステムを運用で補ったという形になりました。会計業務は源泉徴収の取り扱い、領収書に収入印紙を貼らなければならないことなど知らないことが多く苦労があったようです。

いろいろと行き届かなかった点多かったと思いますが、皆様のご協力のおかげをもちまして無事大会を終えることができ、ほっとしております。ありがとうございました。

◆座長からの報告

11：視覚ディスプレイ（装着型）

座長：柳田康幸（ATR）

大会の最初を飾るセッションであり、朝一番にもかかわらず多くの参加者を集めた。5件の発表のうち3件は岐阜大学・木島研究室による前庭反射機能を備えたHMDの研究開発に関するものであり、頭部運動時における画像の揺れをなくし、HMDが実用に耐えるようにするために重要な研究である。松下電工の村上氏は、視覚提示と眼球運動計測を同時に行うゴーグル型機器の開発に関する報告を行った。東京大学の稲見氏は、頭部搭載型プロジェクタと再帰性反射材スクリーンを利用した視覚提示方式におけるスクリーン面の傾きによる明るさの違いを補正する方式を提案した。いずれも着実な研究開発の発表であり、この技術領域の成熟度が増していることを実感するセッションであった。

21：ART（芸術）

座長：森山朋絵（東京都写真美術館）

セッション21「ART（芸術）」は、初日早朝からの開始にも関わらず、充実した発表ならびに質疑が行われた。串山久美子氏他の自己生成プログラムによるインタラクティブ作品「Eco-morph2002」、同じく水棲生物の画像を用いたタッチスクリーン作品「Waves」では、文化施設内でのバリアフリーやヒーリング的要素が評価すべき点であった。渡邊淳司氏による「Augment Performance with Catalytic Devices cell/66b」では、本大会でのパフォー

マンスにも用いられたウェアラブルなデバイスのシステム／コンセプトが、知崎一絃氏他による「SPIDERを用いたインタラクティブミュージック」では常設も視野に入れた拡張性ある展示の可能性などが紹介され、いずれもVR分野の成果を社会に紹介する窓口となりうる研究であった。

31：知覚心理1

座長：小池康晴（東京工業大学）

発表は全部で4件行われ、人間の知覚特性をVR空間の技術を用いて調べる研究や、人間の知覚特性を調べ、新しいデバイスを作成する研究について発表が行なわれた。VR空間の技術を用いることで、現実では危険であったりして確かめることができないような環境において人間がどの様に反応するか、あるいは、現実世界では、条件をそろえることが難しい課題に対して繰り返し実験を行うことができるといったメリットがある。本大会では、知覚心理のセッションが全部で4つも行なわれていることから分かるように、今後、この分野の研究がますます発展すると思われる。大会初日の最初のセッションであったにも関わらず、多数の参加者が集まり、活発な議論が行われたことから、この分野への関心の高さが感じられた。

12：視覚ディスプレイ（一般）

座長：木島竜吾（岐阜大学）

本セッションでは5件の発表があった。掛谷は、管面の実像を眼前に生成することで、輻輳と焦点の矛盾が少ないディスプレイを試作した。双眼像を提示する仕組みが頭部の動きに連動するため、観察位置をある程度自由にとることができる。山本らは、机型大ディスプレイ上に穴の空いたマスクを作ることで、複数人が立体像を観察できるIllusionHoleの提示誤差を評価した。圓道らは、パララックスバリアを用いた円筒ディスプレイを、バリアと管面が相対運動するように構成し、解像度-分解能のトレードオフ問題の解決を試みた。菅原らはドーム型ディスプレイを用い、いくつかの評価指標を提案した。石川は、特に展示等で用いられるスクリーン以外の場所に映像を表示するシステムについて、様々な実現例を紹介した。

本セッションでは、長い歴史を持つ固定型立体ディスプレイの発表が集まった。古くからある領域ながら、新たなアイデアや改良方法が示され、活況を示しているように思う。